

“伝わる文章を書くワザ”を達人が伝授 書く力をつける！ はじめの一步

文章を書くことでもっとも大切なのは、読むひとに伝えること。シンプルだけれど、これが意外に難しいのです。「一生懸命書いていても、できあがったものを読まれると『何を書いているのかわからない』と言われる……」とお悩みの方もいるはず。そこで、人気Webサイト「ほぼ日刊イトイ新聞」にて「おとなの小論文教室。」を連載中の文章の達人、山田ズーニーさんにレクチャーいただきました。 文/山田ズーニー

文章表現・コミュニケーションインストラクター
山田ズーニーさん

Zoonie Yamada
Benesse小論文編集長を経て独立。現在はフリーランスで大学や企業で文章表現力・コミュニケーション力などの教育を行っている。慶應義塾大学非常勤講師も務める。著書に『伝える・揺さぶる！ 文章を書く』（PHP）『あなたの話はなぜ「通じない」のか』（筑摩書房）など。「おとなの小論文教室。」は15年以上連載中。



初心者もまず「この原則」で書ける！

苦手な人も、何からどう手をつけていいかわからない人も、文章はこれで書ける！

「意見と論拠」

問われていることに対して、自分の結論（＝意見）をはっきりさせ、なぜそう言えるか（＝論拠）、筋道立てて説明すればいい。

例題「あなたの目指す教師像は？」

という問題なら、「私が目指す教師像はこれこれだ」と、意見を打ち出し、文章の最後か最初にはっきりと書く。あとは字数と時間が許す限り、読むひとりの人間をイメージし、その人に筋道立てて論拠を説明していけばいい。初心者がまず目指すゴールは「説得」。読み手が「なるほど！」と思ってくれたら順調なスタートだ。

ただし、陥りやすい次のミスに注意しよう。

論拠で陥りやすいミス

論拠「高校の時、担任の先生がとてもよく生徒の話聞いてくれる人だった。私が悩んだ時も、聞いてもらっているうちに安心でき、自分で突破

口を見つけることができた。」

意見「だから私は生徒の話をよく聞く教師を目指す。」

この文章、なぜ、説得力がないんだろう？
論拠を示せと言われて、自分の経験や、新聞等で見聞きした具体例などの「事実」を引いてくる。ここまではとてもいい。だが、ここで陥りがちなミスが、「事実」から一気に「意見」に飛んでしまうことだ。

「事実：担任がよく話を聞いてくれた→だから→意見：私も聞く力のある教師を目指す」では、読み手に「あなたは、たまたまそういう先生が合っていたのだろうが、生徒は多様で求める教師像も多様だからね」と一蹴されてしまう。「事実丸投げ」では、論拠にならない。論拠は、経験を書くところではない。「経験で」書くところだ。

事実「テーマについて私はこんな経験をした。」

考察「その経験に基づいて、私自身がこう考えて、」

意見「このような結論に至った。」

と「事実→考察→意見」で書く。

この「考察」部分があるかないかが、説得力へのブレイク・スルー・ポイント。考察とは、そう、考えることだ。

書くために一番大切なこと

書くために一番大切なことは、暗記学力ではない。受け売りでも一般論でもなく、「自分の頭で考える」ことだ。

そして、考えるとは、「自分に問う」こと。「他にもいろんな先生と接したのに、なぜ私は、あの担任に最も救われたのか？」「なぜ私は、話す力より聞く力を重視するのか？」というように。

「なぜを考え、なぜを書く。」

このとき、「過去→現在→未来」へと時間軸を移動しながら問いかけたり、「自分→身のまわり→働きたい県→日本社会→世界」と空間を広げる、つまり、

「視野を広げて問いかける」

ことが大事だ。「私が教師として働きたいこの県で、昔と今で求められる教師像はどう変わってきたか？」「これからの十年、日本社会はどう変わっていくか、教育に何が求められるか？」というように。

教員採用試験に向けて、視野を効率的に広げるには、次の「4つの視野」で考えるといい。

4つの視野のベースを持つ

試験のテーマや形式がどう変わろうと、それは枝葉の部分だ。ベースとして教員採用試験を受ける人間が、事前に、どうしても考えておかなければならない「4つの視野」がある。

「自己理解」「教師という仕事への理解」「教育をめぐる社会背景への理解」、そして、これら3つの関係づけからあなたが導き出した「将来の展望＝志」だ。

この4つを、つぎのような順番で、事前にいちど自分の言葉で文章にしておこう。どんな問題を出されたとしても、応用できる自分のベースとして活躍してくれる。

1.社会理解（教育をめぐる社会背景への理解）

いま教育をめぐる社会状況はこうで、とくに私が教師として働きたいこの県の現状を私はこう見ている。

2.仕事理解（教師という仕事への理解）

教師とは、だれに対して、どのように働きかけて、どのような貢献をする仕事だと、私は考える。

3.自己理解（志望動機・教師への適性の理解）

今まで生きてきた私は、きっかけとなるこのような経験から（事実）、こう考えて（考察）、教師を目指すようになった（意見）。教師にふさわしいこのような経験・能力・資質がある。こんな努力をしている。

4.志（教師になってどうしたいか将来の展望）

以上のことから、私は将来、教師として、生徒や社会にこのように貢献し、このようによくしていくことを目指す。

200字×4要素＝800字で書く。それくらい短い字数にしていくことで、消化でき、自分自身の言葉となる。逆に、各200字でまとめられないということは、自分でもよくわかっていないということだ。

まとめるポイントは「つながり」。

「自分」と「仕事」と「社会」のつながりをよく考えて「志」を打ち出そう。

教師になること、イコール志ではない。教師になってどんな教育を目指すのか。生徒を、ひいては世の中を、教育の仕事を通して1ミリでも2ミリでも良くしていけるとしたら、どんなふうに良くしていきたいかというビジョン、それが「志」だ。

今回の例題を考えたときも、この4つの視野で、「私が生徒の話をよく聞く教師像を目指すのはなぜか？」と問うていくと、おのずと視野が広がっていく。

私が目指す「生徒の話をよく聞く教師」をめぐる、

1.社会背景から考える

・スマホ中心のやりとりや、情報過多で自分に関係ある情報のみ採り入れ関係ない情報はスルーする人が目立つ。相手の目を見て言わんとすることを聞き取る力は、日々鍛えられているのだろうか？